

めしを食わないよめさん

むかし、ある山の中に、若いきこりが住んでいました。きこりは、毎日山で仕事をしていたのですが、弁当を食べるとき、いつも、

「ああ、めしを食わないよめさんがほしいなあ。なんとかして、そんなよめが来てくれないかなあ」と、ひとりごとをいっていました。

ある日のこと、きこりがまた、

「ああ、めしを食わないよめさんがほしいなあ」と、ぶつぶつしていると、すぐそばの木が、

「それなら、わたしがよめになりましょうか」といいました。つるりとした美しい木でした。

「なんだって。おまえがよめになんかなれるのか」と、きこりがきくと、木は、

「はい。なれますよ」といって、くるっと、いいむすめになりました。きこりは、

(いい着物着て、めし食わないで、まあいいよめだ)と思って、その木をよめさんにして、家につれてかえりました。

ある日、きこりが山へ出かけていたときのことです。ひとりの村人が、きこりの家たち寄りまりました。見ると、よめさんが、大釜いっぱいに、めしをたいていました。まだ昼めしどきでもないのに、おかしいなあと思って、

「そのめし、どうするんだ」とききました。よめさんは、

「ああ、これですか。山へ持っていくんですよ」と答えました。村人は、

(あんなたくさんのめし、山に持っていつて、だれに食わせるんだ)とふしぎに思って、そっとかくれてのぞいていました。

よめさんは、大釜いっぱいにたいめしを、びつつ、びつつと、にぎりめしにして、台の上いっぱいにならべました。そして、頭の髪をざくっと分けました。すると、大きな口があらわれました。よめさんは、にぎりめしをみんな、頭の口の中へ、しっとんしっとん入れて、ぺろっと食べてしまいました。

さあ、村人はびっくりしたのなんの。こしをぬかして、はってにげていきました。ちようどそこへ、きこりが山から帰ってくるのに出会いました。村人は、

「おまえ、めしを食わないよめがほしっていったけど、めしを食わないどころじゃない、一日五升しょうめし食うよめだ。あれはただの人間じゃない。鬼か蛇おに*じゃにちがいないから、すぐ追い出したほうがいいぞ」といいました。

そこで、きこりはつぎの日、山へ行ったふりをして、梁はり*にあがって見ていました。

よめさんは、大釜いっぱいになり、ぴちっと、めしをたいて、ぴつつ、ぴつつとにぎりめしにして、台の上いっぱいになりました。それから、頭の髪をざくつと分けて、にぎりめしをみんな、頭の口の中へ、しつとんしつとん入れて、ぺろつと食べてしまいました。きこりは、びっくりして、

（これはただもんじゃやない。鬼か蛇にちがいない）と思いました。そして、山から帰ったふりをして、よめさんにいいました。

「そろそろ五月の節句せつく*だ。おまえ、里帰りでもしてこないか」

よめさんは、

「そんなら、あんたもいっしょに行ってくれるかい」といいました。きこりは、しかたなく、

「そうだな」といって、よめさんといっしょに行くことにしました。

ふたりは出かけました。よめさんは、

「あの山のむこう。その山のもうちよつとむこう。この山のむこう」といいながら、どこまでもどこまでも歩いていきます。どこまで行っても、家一軒見あたりません。きこりは、気味悪くなってきました、

「おれ、便所べんじまに行きたくなったら、先に行ってくれ」といって、よめさんを先に行かせ、自分は、わらわらと走ってにげだしました。

よめさんは気がついて、

「このやろう。どこまでにげたって、にがさないぞ」といって、鬼になって、ブーンブーンと追いかけてきました。きこりが走っても走っても、鬼は追いかけてきます。（もうだめだ）と思ったとき、よもぎとしょうぶがいっぱい生えているところに来ました。きこりは、そこにとびこんで、ひたつとうつぶせになって、かくれました。

鬼はブーンブーンとんできて、きこりを見つけると、

「こんなところにいたな。ひと思いに食ってしまいたいが、この中に入ったら、おれの命がないわい」といって、きこりのまわりをブーンブーン走りまわりました。

鬼は、

「よもぎとしようぶじゃ、からだかとける」といいながら、いつまでも走っていました
が、どうすることもできないで、どこかへ消えてしまいました。

それで、五月の節句には、よもぎを屋根にさしたり、しようぶを軒先のきりにさしたりして、
魔まよけにするのだそうです。

* とんびすかんこ ねっけど

* きこり 山林で木を切って生活する人

* 五升めし たくさんのめし。米一升は、やく一・五キログラム

* 蛇 へび。ここでは、妖怪ようかい化した悪い神さま

* 梁 屋根の下にある、柱をささえる材木くわいぼく

* 五月の節句 五月五日、たんこの節句のこと。よもぎやしようぶをのきにつるした
り、しようぶ湯に入って、病気になるないようにのる

* とんびすかんこ ねっけど 「おはなしはおしまい」という意味の決まりもんく。地
方によってことなる

原話：『雀の仇討』野村純一・野村敬子／東北出版企画
再話：村上郁